WASON
HQ
1104
J74+

驛遞局認可

明治十九年一月二十五日發行

每月三回發兌
一冊正價四錢

女學雜誌

第拾三號

東京 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Sode hichi te musubi shi mizu no, kooreru wo ;

haru tatsu kyö no, kaze ya toku ran. (下に譯あり)

女學雜誌第拾三號目次

社說、光陰惜まざる可らず●新報、御歌會初、外數件●技藝、音樂を學ぶ者の心得、書かくことと奏づること、茶の湯は癈すべし●佳傳、富井於菟子の畧傳、婦人羅馬は滅亡を濟へる事附圖●叢話、小督は局琴を彈ずる圖、美麗と云ふと(二)色慾は罪、日本古代女流の風俗(二)●寄書、フヱリス學校時習會の趣意、明治女學校生徒の文二章●結婚者年齡概況●諸廣告

一月二十五日

そでひちてむすびしみづのこほれるを
はるたつけふのかぜやとくらん

珊瑚の珠

女に四つの行なひあり。一を婦德といひて女の德なり智惠才能人に優れたるをのミ云ふに非らず心だて潔よく正しくして操を守り身の行なひ恥る心ありと起居動作禮法に違はざるを云ふなり。二を婦言と云ひて女の言なり利口辨舌足りぬるをのミ云ふに非らず言を撰び言ひてさかなきことを云はず云ふべき時に當りて言ふ計りにて辭多からず不問語りせずしてかしましと人に厭はれざるやうにせるを云ふなり。三を婦容と云ひて女の容貌なり顏貌麗はしきをのミ云ふに非らず垢つき汚れたる衣裳は早く洗ひ濯ぎて潔よくし其の時々に浴ミ沐ふこと惰らずして身の不潔ならざるを云ふなり。四を婦巧と云ひて女のなせしわざなり其爲の巧ミなると人に優りたるをのミ云ふに非らず心にいれて縫織りする業を惰らずたはむれ笑ひて徒らに遊ばず家の内のはからひ怠らざるを云ふなり。此の四つの行なひは女の大なる德義にして一として欠くまじきことなれば心を放たずして常々勉め行なふべし(女誡)

女學雜誌第拾參號（明治十九年一月廿五日）

●社說

○光陰惜まざる可らず

左の一篇ハ明治女學校の校長木村熊二君が去年末冬期休業の前日に於て同校女學生の前に於て演述ありたるものなり今ま請ふて之を玆に掲ぐ

昔時晉の陶侃常に人に語て云く大禹ハ聖人よして乃ち寸陰を惜めり衆人に至りてハ分陰をも惜むべしと又た云く遊逸して時に益なく后に聞ゆるなきハ是れ自ら棄るなり」と諸君將來有爲の婦人たらんと欲せバ宜しく志を勵し力を勤むるヿ陶侃の如くすべし決して遊逸す可らざる也夫れ人情ハ常に惰漫に安ずるものなれバ淸筵を開きて花に坐し羽觴を飛して月に醉ふ春の夕ハ特更に一刻千金の値ありとて却て其の時の移るヿ惜めども庭の山茶花紅落ちて北窓の風膚に寒き冬の日ハ爐を擁して閑談に時を移し光陰の左程貴重なるヿも感ぜざるなり彼のニウヨークの商人が一時ハ千金ありとて東馳西奔して商業に勉勵する景狀を見て俗客繁忙の場紅塵十丈の地獄なべしく我ハ閑散無事に光陰を消する漫然たる淸世の一閑人なりと誇り顔に撚髯する先生や妾ハ新富座の批評と鹿鳴館の踏舞よハ妙處に入りたりと軟語し玉ふ佳人ハ余儀なき次第なれども苟も將來一事業を爲して自分のみか人の益をも謀らんと思ふ慈善に富み愛國心ある婦人ハなどか今日自巳が社會の慘然たる景狀を坐視するに忍びんや幸に仁愛の心より發して自ら婦人の職務を盡さんと欲するものあらバ志を立るヿ甚だ堅確にして必ず將來の目的に注意し一日も安寢すべきにあらざるなり我が輩近日婦人社會の狀を察するよ自ら棄るの人極めて多し對坐終日無根の言辭を弄し浮泉の筆翰を弄して自ら喜び衣食の末に注意して安佚のみを好み世間に出て仁善の事に力を盡すに意なし嗚呼其の社會の振ハざるも亦た宜べならずや

昔者カルセージの人民が羅馬の壓政を受けて巳に奴隸婢妾とせられし時全國の婦人は綠の黑髮を斷ちて之を弓弦と爲して男子に贈りて羅馬兵に抵抗せんヿを乞ひたり又たワシントンの妻マルサは其の國人の奴隸とせられんヿを嗟きて夫と共に革命の軍中に在りて自ら兵卒の繃絆を纏ひ病兵の看護を勤めたり抑も英邁ある婦人ハ奴隸となり壓制の下に生存するヿを斯く迄てよ嗟くなり我が國の婦人ハ今日如何なる有樣ぞや我輩之を聞くセラマーチンはカイストルの貧女なりしが一日街頭に於て零落したる婦人が罪を侵してヤルマウスの牢舍に送られたりとき丶如何

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

よもして此の婦人の志行を善良にせんものと思ひ立ち其の半舍に至りて婦人に面會し其の意を述べたれバ婦人もセラが高尚なる思想を持てるに感じて遂に善良の婦となりたり」と吾が國婦人社會に一人のセヲマーチン或はマルサ、ワシントンありたらんよハ豈に近日の如き憐むべき有樣に至らんや諸君は年未だ若し婦人社會の實狀を知らざれバ我が輩か今ま其の憫れむべく嗟くべき景狀を述るも恐くハ感動し玉ハざるなり併し他日太平海を航して米洲に入り或ハ印度洋を過ぎて歐洲に遊び婦人と男子の關係又た婦人ハ如何なる事を爲し得べきものなるやを看一看せバ直にマーチンとなりて已の姉妹等を墮落の中より救濟せんと思ふ精神ハ必ず勃然興起して禁ずる能ハざるなり

我輩今日諸君の前途を考ふれば其の勉むべき義務と爲すべき事業ハ甚だ多し豈に今日學バずとも明日あり今年勉勵せずとも明年ありと云ふ事を得んや明治十八年も早く已に盡きんとす歲月の人を待たざる又た駭くべきなり今や諸子ハ學校に來れば之を薰陶する教員あり家に在れバ之を奬勵する父兄あり螢を集め雪に映ざるときハ今を捨て果して何の時なるや諸子生涯の榮枯得喪も今日勤るゝ勤めざるとよ由りて判定すべきなり然るよ一刻千金に價する貴重なる時間を談笑遊戲に消するハ黃金珠玉の山に入りて手を空しくして歸りたる諺と相似たり愚亦た甚しからずや或ハ云く婦人の性ハ靜逸を好み退縮を尊ぶものなれバ常に帷を下して書を讀めバ必ず身体に不測の病を生ずるに至らん顧みざる可らずと此れ其の一を知て其の二を知らざる說といふべし婦人の性ハ活潑なる擧動を好まず常に靜逸に在らんことを欲するものなれバ書を讀み思想を凝らすことハ其の性の欲する所なり深く身体に害を爲すものに非ず精神の疲を慰せんと要せバ宜しく歌を唱ひ樂器を弄し或ハ繪畫彫刻の美術を試み或ハ戶外を運動すべし何ぞ空談に時を消するを以て身体の健康を養ふと云ハんや

我が輩こゝよ時間の貴重なることを諸君に告げん人世纔に五十年七十ハ古來稀なりと言ハずや幸よして七十まで長生するものと見做し之を計算するに人生れて十才までハ何事をも爲し得る能ハず十才より學に志し藝に遊び二十才にして學藝を卒へ二十三四よして嫁ぎ疾病と雜務に消する時を三十年とし又た六十才より七十才を老衰の時とせば有用の時間は全く十年なりとす苦學勉勵の結果を此の十年の間に活用せんとするものなれバ事業を爲す年月ハ隨分短き時と言ハざるを得ざるなり故に諸君ハ分陰をも惜んで勉勵せざれバ決して志を遂ぐる能ハざるあり語に云く

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一滴の水も絶えず落るときハ石を透すべし一簣の土も積んで山を為すと諸君が今日學びて得る所の利益ハ甚だ少なる様なれども一日學び得る十語の英語ハ一年の后ハ三千六百語の多きに至るべし孜々惰らざれば必ず涵淹蓄積して他日ハ胸中に万卷の書を藏するに至らん諸君の日に身に得る所のものハ金銀珠玉よりも美麗に其の身を飾るものなりと云ふも決して虚言にあらざるなり然れども諸君西洋の書を翻して未だ十分の佳境に入らざれば之を解剖し之を熟讀するの際ろハ困難なるとハ五里の霧中を歩み千仭の山に登る心地もなしと雖へども一日の課業ハ諸君をして智識の山巓に達せしむべき楷梯の如きものなれば須臾も緩漫に學習すべきにあらざるなり之とも顧みず寸陰線晷を徒らに送りなば隙行く駒の足早くして老た疲癘の時迫がん左すれば學ばんと思ふ心の張りも矢よりも早き歳月と共に弛み去りて燃え出る若草の花咲く折りも早く頭に霜を置くに至らば誰かハ之を顧んや黒貂の裘弊るれども六國の印ハ未だ來らず樞縄の門ハ朽れども長者の車ハ終に見えず千たび百たび悔るとも其れ將た何ぞ及んやいざや諸君ハ年最と若し氣力と云ひ精神といひ十分余りある時なれば百尺竿頭に一歩を進る心地して勉勵せずんばある可らざるなり

●新報

○御歌會初　去る十八日午前十時御歌會始の式を宮中に於て行はせられ畢て關係員一同へ酒饌を賜はりたり

御製皇后宮御歌及び詠進撰歌は左の如し

明治十九年一月十八日御歌會始

緑竹年久

御製

九重のうてなの竹のみかみどりかはらぬかげぞひさしかりける

御歌

年ふかみみどりそひゆく呉竹のかげこそみよのすがたなりけれ

二品勳一等晃親王（山階宮）

色かへぬみはしの竹は大御代のいやさかえゆくしるしなるらむ

二品熾仁親王妃董子（有栖川宮）

年ふかみみどりくはゝる呉竹はさかゆく御代のしるしなるらむ

二品貞愛親王妃利子女王（伏見宮）

年ことにみどりくはゝる呉竹はみよとゝもにやさかえゆくらむ

故三品博經親王妃郁子（華頂宮）

色かへぬみはしの竹のとことはにたちさかゆへき君か御代かな

内大臣從一位大勳位公爵臣藤原朝臣實美上（三條）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

年をへてなかくなりゆく呉竹のみとりにこもる千代のいろかな

侍従長正二位勲一等侯爵臣藤原朝臣實則上(徳大寺)

かきりなきちよのこもれる篁はうれしきふしのかつも志られす

題者點者　元老院議官正四位勲二等源朝臣美靜上(福羽)

年のはにさかゆく竹の深みとりつきせぬみよのかけこもるらむ

元老院議官兼式部長官従二位勲三等侯爵臣藤原朝臣直大上(鍋島)

うきふしを知らて年ふる御代なれやいろこそまされそのゝ呉竹

宮内大輔正四位勲二等伯爵臣藤原朝臣友實上(吉井)

うつし植しそのむかしよりくれ竹のかはらぬ色をみるそ樂しき

宮内省二等出仕従四位勲三等臣平朝臣孫七郎上(杉)

志もゆきをしのきゝて呉竹のみとりはいよゝさかえゆくらむ

宮内少輔正五位勲三等臣源朝臣敬三上(香川)

君か代はちよもやちよもくれ竹のみとりの色のかはらさるらむ

點者宮内省三等出仕正五位勲四等臣藤原朝臣正風上(高崎)

いくはくの志もをしのきてくれ竹のよにわらされし操なるらむ

講頌　正二位臣藤原朝臣實徳上(正親町)

九重のみはしにちかきかは竹のみとりかはらていくよへぬらむ

講師　正二位勲二等臣源朝臣慶永上(松平)

いつみてもふかみとりなるくれ竹やかはらぬ御代の姿なるらむ

○女生徒の衣服　なべて女は飾を好むものなれバ特更に衣類に心とろゝぐと無理ならぬ情もあれど凡そ世の女風を改めんことに盡すべき女生徒はつとめて此の弊を去ることに心掛ずバ不可なり特に若し女生徒中にて衣服のことをかれこれと掛念し合ふ如きことありてハ尤も不可なり但し富貴の人ならバ成るべく衣服を粗にして貧者の子の愧ぢざるやうにすべし貧者の子の衣服あしきを愧ぢとするも良からずと云へど富貴の子の亦た思ひやりて衣服を粗にし美風俗を造り出さんことに心掛けざるも宜しからじ願ふは凡べての女生徒の衣服を清潔にすることをのミ望みて之を美麗にすることをつゝしミ玉ふやうあらんことを子も母達も此の心し玉へかしと告ぐ

○女生徒の運動　は切要なることなり婦女の身体の強からざるも太速に長者氣びて婚姻を速にすべきこととなるも随て學文する時期の短くなるも皆な運動の足らぬ故なり運動にいろ〱ありと云へど婦女にハ成るべく手足を多く要する類ひの運動を行ハせ此に由りて居作の体を學バしむる便ともなすべし且つ時にハ教師たち伴ひて一里余の遠方へ連れ行きひろ〲としたる場所に清く樂しき遊びを為さしむべし女は總じて氣のむすぼるゝ者なり之を導くものハよく〱此を散ぜしむるの心得ありたし此の

頃諸の女學校を見るに運動の科特に不足なる如しつとめて此の一事に注意あらんと當今の要務なり因に云ふ歐米の女は馬にも乘り水にも泳ぎ舟をも漕ぐなり我が國にて今まにいかに斯る類の運動させんとは不可なれど遂には此に至らすやう望まざる可らず

○三介の改良　前号に浴湯の改良と題して浴湯の道德大に進みたることを記し慶賀したるが今まも亦た聞く所に由れバ婦女の背を流す三介にして股の邊を裸にし甚しきは下帯一つの外何をも着けざるなんど實に醜き限なれバ之をして是非とも股引を穿たしむるか又は婦女の三介には婦女を用ひしむることとなるべしと云へり政府にてかく迄で注意深く道德の事を思はるゝに至れるハ吾人の大喜しく止まざる所ろなり希くハ入浴さるゝ婦女諸子も勉て靜粛に勉て温和にして俗に所云る女風呂は內に陰にして板の間に陽なりとまで言はるゝ如き喧嘩なからんことを云ふ吾人は早く日本の富進歩して一人風呂なるものを得るに至らんことを切望するものなり

○藝妓擬すべし、令閨宴に伴ふべし　今日の酒宴とあれバ必ずしも藝妓なるものを招きて耳を破らする如き音を響かせて糸の音をよしと云ひ口に不道德の言を言ひ合ひて得たりとするなんど嘔づく斗りに卑しき有様なり追々に之を止めて藝妓なんどは只だ其の藝をきく迄で酒宴に招きたきことなり之につきて思ふは凡ろ宴會には夫と共に令閨の伴はるゝ如き風儀の流行せんとなり斯あらバ宴會の風も自ら清潔となり男子も不道德の言を吐くをつゝしみて交際自らに高尙となり婦女も亦た家にのみ垂れ込むれ弊を除け人と相ひ交り世に出ずゝ自ら進むの氣象も自らに養れき夫の宴會后あしき場所へ陷り行らん憂もなく夫婦共に樂しみて家內の睦も自らに深くなり行なん希くは宴會に婦を伴ふの風をしてたゞに上流社會の夜會にのみ行はれせで廣く一汎の習はしとならんやう希望にたえず且つ令閨諸子の亦た自ら奮て此の覺悟を養ひ玉はんことを願ふ

○慶新會の唱歌　慶應四年の正月三日伏見戰爭の折り共に彈煙彈雨の中を奔走されし方々が毎年開設せる同會は去る三日に芝の紅葉舘にて相變はらぜ集會の盛宴を張られしが其節に奏でし唱歌は或る方の作にて同舘の侍女が曲節を付けし者なるよし即ち左の如し

王政復古のみのかみを。おもへバ凄し慶應の。三とせの冬の十二月。九日の日をはじめにて。都の空にたちゝへる。春の光りもぬバたまの。世はかりごもとみざれつゝ。あやめもわかぬす

みゞめの鞍馬にひゞくときの聲。鎧の袖にかゞやくや。星の位も二台の。かげうすれゆくさしぐしの。あかつき暗き鳥羽伏見。大内山の山風に。錦の御旗ひるがへし。大將軍のいでましに。勇氣いやますますらをが。いくさよばひもいかづちと。森き出たる修羅の道。きりつ斬られつ阿毘叫喚。ちしほにそむる紅葉の。赤き心をとりぐに。たふれかさなるゑかばねは。敵の身方か彼は誰れ時。踏みしだきゆく戰場の。ならひ常なき露の身と。かざすつるぎのつかのまも。君を忘れぬもの丶ふの。道のはてこそあはれなれ。天地も動く震動に。炎さかまく淀の城。おほへる雲のたちまちに。煙のすゑのかげろふも。きえて治る君が代の。のどけき春にうちまどゐ。むかしがたりとすぎし世を。かたりつ丶酌むさかづきに。老たるかげもかつ見ゆる。このうたげこそたのしけれ。

〇海外留學を命ぜらる　東京府士族加藤清人女錦子は昨十八日文部省に於て普通師範學科及び幼稚園保育科修業の爲め滿三箇年間米國へ留學を命ぜられたり(文部省報告)(本年一月十九日官報)

本號に揭載すべき事柄が澤山でござりますゆゑ文學の欄は次號までた預りと致します

●技藝

〇音樂を學ぶ者の心得

前号にハ我國に流行する三味線と西洋の樂器ピアノ、オルガン、などとを比較して成るべく三味線と癈止たきことと說きたり其の節にも申したる如く音樂は婦女の學ぶに適ふものにハあれど今の如く何人にても皆な必らず之を學ひ置かねバならぬ樣に心得て無理にも之を敎へんとするハ宜しからぬことなり抑も音樂は一つの技藝なれバ此を修めて立身の基と爲さんと欲するものハ必ず一生をこめて之を習ひ覺ゆべし左なきにあらねバ徒らに大切の日月を費すこと愚かしき所存なり然るに此を技藝として之に由り立身せんと思ふものハ固より其の性質のよく音樂師たるに適するものならずバ不可なり若しその性質にして適せざるは只だ勉强のみにて出來るものと心得るハ大なる誤なり勿論勉强して成らざることなしとまで云へバ遂にハ上達することもあらんかなれど若しそれ程に他の己が性質に適することを勉强しなバ更に非常の上達を爲し得べき名人となるべきことゆゑよく〳〵初めに其の身の音樂を學ぶに適するや否やと思ひ計るべし

さて如何なる人が音樂を學ぶに適するやと云ふに所云る音樂の耳を持てる人卽ち是れなり音樂の耳とハ音樂を聽きて調子の外

れたるをきゝては耳に逆ふ如く覺えて不快を感じ音符の違ひたるをきゝては又た耳に逆ふ如く覺えて不快を感ずる如く樂の調をよく聽き分くるものを云ふなり此の耳を持ちたる人ならねば到底如何やうに學び勉めたりとも遂に音樂の名人とは爲り得まじきなり

凡そ音樂を一の技藝として立身の爲め修め習はんと覺悟する人は宜しく此の言に注意して自己を知るべし斯あらで志を立つるは賢からぬことなり但し音樂の理合よりピアノ、ヲルガンなんど一と通りの手振りは婦女の學校に於て教授あるべきこと可なるべしたとひ之を以て立身の藝と爲さずとも一には婦女自身のなぐさみとなり二には一家内和睦の助けとなるべし蓋し世務の煩はしきに衰へて歸りたる父の心、物事のうきにやつれたる夫の思ひ、子をいつくしむ母の喜び、姉妹と思ふあね妹の愛、なんどとなぐさめんとて一家内に彈じ樂しみなば音樂一手の心得も其の効あるべきなり尤もかゝる清き樂しみの爲にとては西洋の樂器を初め琴笛の類を云ふのみ前に云へる如く三味線は成るべく之を擯止せんこと吾人の願なり

附て言ふ今の女學校に書學を教ゆるものはあれどピアノヲルガンなんどを教ゆるは稀れに有りて多くは少し本文に云へる如く其のくはしきを教へんとは不用なれど書學を教ゆると均しき程の度までは科業として之を學ばせられんことを可とすナポレヲンの語にも音學は人の道徳を鼓舞する最上の音なりと云へり之を教ゆると啻に本文所説の如き得あるのみならず女生徒自身の道徳をすゝむるにも亦た其の効あるべきなり

○畫かくと奏づると

技藝の妙に達せんには畫をかくにも樂を奏でんにも皆な一樣なる心得あれば往々變通して發明するところを得るものなり昔し大雅堂とて名高かりき畫人弱年の頃ろ畫を學ぶと共に又た三絃をも好めり其の頃京都に三絃の妙手なる安永撿挍と云ふ瞽者あり大雅故さらに居を其の隣に移して日々安永が門人に教授するの絃音をきゝて心を慰めたりき或るとき大雅安永の家に至り其の隣に卜居したる所以を告げて一曲を所望せり安永其の志の懇切なるを感歎し傍にかけたる三絃をとり一曲を彈じたり然るに其の三絃は裏皮敗れ居て何となく絃音の耳に適せざるやう覺えしかば今ま一曲皮全きものにて彈じけむことを乞ひしに安永甚だ快からぬ面色にて曰く君は何を業とせしや大雅答て曰く畫を業とせりと安永曰く君の畫は定て拙かるべし其の言をきく大雅は心怡ばず瞽者の身にして一家を爲せし某に對し巧拙を口走る

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ハ片腹痛きことに思ひ何とて撿挍ハ予の書の拙きことを知れりやと安永答て曰く今まで裏皮破れたる三絃を彈せしハ君が意に適せざる乎と凡て三絃ハ右手に撥を持ちて彈くを誰れ知らぬものなし然れども左手に精神なくてハ妙處に至るものゝみ非ず今まで予が左手の精神君が耳目に感ぜざるを以て察するに書も亦た右ゝみ筆を揮ふハ言を待たざれども恐くハ君ハ左に精神あらじと大雅之を聞き甚だ感服し其の忠言を謝して歸れり其の后ち大雅安永が言を服膺し意を書技に用ひると深切なりしかバ其の技大に進み終に一家を作して聲名を天下に轟かすに至れり大雅常に云く予が筆意の進みしハ是れ偏に撿挍が恩惠なりと是れ曾て大雅堂と交深かりし本間某の遺談なり

○茶の湯は癈すべし

一度び復古せんとするの兆ありたる茶の湯も此頃は亦た衰へかゝりたれバ特更に論ろふべき程にハあらざるかハ知らねど此の如き無用有害の技藝ハ成るべく全癈したきとなり此の文明の時に至りてかゝる閑々なる遊事にながく〳〵の日を消し然も一つの効もなきなれバ凡そ志あらん婦女は勉てかゝる遊を絶やすことに勉むべし行儀を敎ゆるに宜しと云へど既に女禮の式あれバ斯ることにて敎へども足れりいとく〳〵やめたきは此の藝なり

食物の料理方心得のつゞきは余白なきに付き次号へ讓る

●佳傳

○富井於菟子の畧傳

子は昨年十二月二日果敢なくも此世を去り玉ひたり其生前の履歴は有髯の男子をも驚かして膚寒からしむる如き熱心の奇行あれば吾人もとくにも本誌に揭げて世の姊妹等に報じ其の御心得の足にもなさなんと思ひたれども之に尤も縁故ある自由燈の坂崎氏及び植村正久氏ハ各感ぜる所を加えて精密の傳紀を作り世に報ぜんと爲し玉ふ由をきゝて暫く其の出るを待ち万一の誤謬若くハ不十分のあやまちを爲さゞらんと扣へ居りたるに今に至りて尚ほ二氏の報あらざるに由り左にきくがまゝを記して假りに之を姊妹の覽に供ふ他日精密の傳紀出でなバ更に揭げ出さんと固より吾人の望なり

子ハもと播州龍野の人なり幼き比ろより平常の娘孃と異りたる所あり近隣の人々よりよしあしとの評あるにもかゝハらで斷乎と學に志し小學校を了へたる后ち中學校に入り十七才の時之を終へ玉へり當時其のあたりにて大なる評判ありしとも新聞紙上にまでも現ハれたるとなりとぞ斯て其の時より志を勵し且つつらく〳〵日本婦人の有樣を見其の卑屈無有爲にして死したる物

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の如く人間固有の權利も得で甘んぜると全く其の教育なきに由るものと考へても其の身の任のまそく重きを知り如何にもして京地に出でゝ尙ほ聞見とひろめ志あらんものとも交はりて望む目的を貫かばやと思ひ立ち屢ば父母に迫りて其の許を乞ひ玉ふと云へど愛深き兩親はさそがにそれと諾べなひ玉はざるうち荏苒日の過るに心いらちて善からぬことは固より當時にも考へ玉ひ后にもしばしば悔ひ玉ひしならんとは云へ遂に家を脫して先づ大坂に登り岸田俊子とて名望ある婦女の先覺者を訪ひ遂に其の塾の塾頭となりて暫く子弟を教育し初て志たる目的を達そるの緒を開かれしとは云へ岸田子も固より文筆に才ありて詩歌畫圖をも好み玉へば淡泊にして且つ其の志を達するに任のおほひかゝるごと思はるゝ富井子とは少か合はざる所ありけん玆を去りて后ち板垣退助氏などの知己となり其の紹介にて東京に上りたる后ち坂崎紫瀾氏のもとに宿ども專ら哲學を研究ありたり婦女にして高尙の哲學を修め玉ふなども類ひ稀れなる事と云ふべし斯てあるうち又たつらつら思ひ爲そに大凡そ今の日本婦女たるもの其の道德は低く志望も卑しと云へどももとく自ら好みてのみのくあらんとに非ぞ男子たるものゝ束縛をうけて自由なきより止むを得ぞ身の行を淸らかに爲そ能はざる趣あるべし日本婦女の道德をすゝめて之を淸らかになし得るやう教育せんには先づ其の根本たる男子より改良せざる可らぞと悟り是れよりは此と目的として專ら日本男子の改革に志を轉じその比ろ盛んなりし自由黨の人々と交りて共に國事を論ろふとも屢ばなりしと云ひ后ちは遂に自由新聞社に入りて社務を執り玉ふとと爲りたり然るに言論の用ひらるゝと稀れにして間ま黨員には粗暴の行を爲すもあり到底ろゝる事にて日本當時の景况を改良そると能はぞと悟りてより再び志を元にかへして專ら文學上に婦女を教育せんとに盡力あると爲りたり此時同交の婦人景山子はあくまで富井氏の前志と均しき者を貫かんとて分れ玉ひしが此頃さく所に由ればは彼の大井、馬場氏等の不容易なる陰謀に加擔したりとの嫌疑にて今ま大坂の獄舍に在り玉ふ趣なり共に有爲の質なれども當時そでに志を轉そて他の方向を執られたる富井子の見識は亦た感ずべき事と云ふべし斯て后ち遂に木村熊二、植村正久等の諸氏と謀り方今隆盛の運に向ひて駸々たる彼の明治女學校を設立しろの漢學教員と爲りて子弟を導かれたるに天命は知る可らぞ人世は浮雲の如し惜ひかな昨年末二十一才を一期として果敢なくも幽界に去り玉へり其の履歴に就ては前述そる外に尙ほ種々の感ずべきとあり日本と淸國との葛藤ありし節か

ねて支那公使館中に入り込み謀り玉ひし所ろもありと云ひ又た福澤輪吉氏などにも面會して度々日本婦人の改良策を叩かれたることもありと云へり如此く記するときは其の人と爲り落々不羈にして婦女子の如き優温の行ひなかりしならんと思ふ人もあらんと云へども之を見るに決して然らず謙遜温和にして容易に人と論ぜず且つ信切にして貧人を救ひ玉へる篤行現はれありしなり其の葬式の節植村君が柩前に立ち「今ま吾が前には温和なる淡泊なる信切なる有爲の姉妹を横はらせたり」と云ひ玉へるは蓋しよく其の平生を盡されたる言語なるべし子は永遊の前に於て遂に基督教を信じ玉へるより此の教の式に隨て送葬したり當時余は之に臨み生前數度面會したることもあれば特更に悲哀極りて涙にむせびたり天もし許し玉ふならば他日我が國の婦女を教導するに就て尚ほ大なる功德あられしならんにと思ひ廻はし柩前に花一箇を藏て永く子の紀念と爲せり巖本善治涙を灌て記す

附言。同子の傳紀は遠からず精細の報あるべく特に坂崎氏の如きは別に一書を此の爲に著はさんとまで望まるゝ由なれば同子一生の事蹟をたゞ本文所記の事に過ぎずと思はれざらん樣希ふと云ふ

○婦人羅馬の滅亡を濟へる事

今を距る二千三百余年の昔し羅馬と云へる富强の國あり茲にカイアスマルシウスとて膽大に氣猛き一人の勇士あり曾て羅甸の都コリチリを攻め破りて其の勇功をあらはしてより人皆なあだなしてコリチラナスとは呼びけり然れど性質高慢にして人を物の數とも思はざれば平民社會に評判あしく遂に之をわげて領事に撰ぶことだも爲さゞりしよりコリチラナス大に怒りかつて都に饑饉ありて糧をやうやくシヽリーに得て之を都の民々に配付したるときコリチラナスは前日の怒を晴らさんと思ひ議官にすゝめて之を平民に配ることを止めさせ若しも平民にして其の議員を擧ることを廢さば糧をも與へんと云はせたり平民之をきゝて大に沸騰しコリチラナスを四裂にさき懲らさんと騷ぎ立ちたれど鎮る人ありてやうやく治まり遂にコリチラナスを都の外に追放する卑しき刑をぞ宣告しけりコリチラナスは恐るゝ氣なくゆう〳〵都を出でゝ行くボルシアンと云へる國は久しく羅馬の敵なれば之をたてゝ兵を起させ國王を説てみづから大將となり數多の軍勢を引卒して本國なる羅馬の都へ攻め上れり其の攻る所ろ必ず破り破る所ろにて平民を屠り過る所ろをあらしすてゝ早や都を去る數里と云ふ郭外近きあたり迄でも近寄りたり」都内の人民恐ぢおそれて驟かに救を乞はんと欲しまづ第一に議官中の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

名ある十八の使を撰び之を送りてコリチラナスの怒と解き羅馬府民の命を乞ハせたり然れど此人心剛おして如何なる慰をもきくに非ぞ羅馬ハ已れが随意次第に之を屠るべしと取てもつかぬ待遇よ使ハ使命を果たさぞして空しく都に歸りたり此上ハ第二の使節を遣ハさんと翌日主祭、占人、フレーメン等を送り教導よよりて心を和らめさせんとしたれど是れ亦たコリチラナスの情と動かす能ハぞ最早や羅馬の運命ハ翌日一日と思ハれたり大將ハ二度の使を追立てかへし遙に眼と放て府城をながめ多年の怨恨ハらさでやとたゞ見る向ふの路の上に婦人の一列しづくくと涙にむせび來るあり此ハめぞらしと打ち守れバ第一なるハ母べチウリア第二ハ妻のボルムニア手よハ幼子と携へて物思ハしく歩むなり后よハ數多の婦人たち行儀たゞしく陣所へ近寄りたやそくハ物言ハぬまでのなしみたる母のかんバせを見るに付けてハ如何に勇猛剛膽のコリチラナスの胸の火もよハらよ勢おとろへて暫時ハ默して扣へたりあたりを守る兵卒バらも三度の使のありさまに故あるらんと靜まりかへり一軍よハうよひつそとして羅馬城外數里の野、天ハるゝと云へども靜かよして悲く四面の景色慘怛たりき

（次号へつゞく）

小野小町の傳續稿ハ余白なきに付き后ちの號へゆづる

●叢話

○小督の局琴を彈ぞる圖

物古びたる草屋の内に一人の宮女月に乘し琴を調ぶれバ籬の外面にハ烏帽子狩衣の官人ありて馬上に笛を横へ興ありしく見ゆる樣を寫したるハ是れ世に多き小督彈琴の圖なり（本号の寄書よハ之を記したる文二つあり）平家物語其他の書によれバ小督ハ高倉天皇の宮女にして容貌麗しく且つ能く琴を彈くを以て帝の寵愛淺からざりしが平の清盛已が女を以て中宮となしてより小督と忌み害と加へんとせしとき、乃ち宮中を逃れ出て知るべを尋ね嵯峨野の奥に隱れしよ又た露るれバ如何ある憂目に遇ふも計られぞとて明日ハ大原に去りて尼とならんと覺悟を定め今夜限りの名殘りにとて彈き馴れし琴を取り出で、想夫戀の一曲を調べたり時しも八月十五夜にて　帝ハ月に對し常に思ひ絶えせぬ小督の事を思出され宿直せる中宮大夫仲國を召し一通の御書と御服とを出し賜ひ彼を尋ね渡せよとて御寮の馬を賜ハりたり之に打乘る仲國ハ風に聞く嵯峨野あたりを尋ぬるに木立の中より琴の音漏出で、其の調べ曾て宴に侍り笛を吹きしとき小督が合奏せし爪音に彷彿なれバ是れなん其の隱家なるべしと覘見るに中より一侍女の出でゝ之を制せしとも聞かで直に片折戸押

し開き御書と御服を參らせ　帝の何言をも傳へ其の返事を携へ歸りて之を奏し又た重ねて迎に行き宮中に伴ひける其の后ち此事清盛が耳に入り小督ハ再び追放されたりと云ふ是に由りて觀れば屋内の琴と馬上の笛と相ひ和する趣を畫きしハ宮中と嵯峨野とを湊合して一となせしものにて所云る畫ろらごとと云ふべし此時仲國ハ笛を吹かざる畫ろそ恰當ならめ

○美麗と云ふ事（二）

又た身体に文するとハ所々の野人に其の類いと多しニウジーランドにて或る宣教師が如何にもして之を止めしめんとしたれど其地の民等ハ年若きとき少くとも唇の上に數個の線と引き置かでハ年老ひたる后ち甚だ醜からんと云ひ其の邊の男子等ハ亦た必らず面貞に文して佳人の愛と引かんとし戰爭の時にも花々しく目立なんとを望むと云へり又た亞弗利加の或る地方にてハ前額と腮とに星の如き黒點をいれ置くとハ愛敬の面を裝ふに欠く可らざるとと主張せり其他ラボックと云へる人の著書を見れバかゝる野人の圖あまたを掲げあり甚しきハ面貌中悉く黒線のうづまきたるを見る事りなるあり之とも彼等ハ美麗なる化粧とハ思ふなりし此れより追々に進歩したる人民等の有樣を見て其の美麗とする所を考ふるに北印度人ハ廣ろき平たき顔に小さき目高頬骨、頬を横ぎりて三四の黒線を文したる、前額の低き、腮の大にして廣き、不手際に曲りたる鼻、鳶色の面色、胸の下腹へ垂れかかる如くなりたる等を以て婦女中の美人とし北支那に至りてハ廣き頭、高頬骨、廣ろき鼻、大なる耳、等あると佳人の佳なるものとぞ但し日本及び支那にてハ腰の柳の如く細きを宜しとそれど西洋にてハ全く之に反し其の高く出でたる氣色なるを可とぞるのみならぞホッテントット邊の女ハ臀の尤も高く出でたるを美なりとするより其うちの尤も美なるものハ一度び坐するときハ臀の重たさに獨り立つ能ハぞやうやく繩にすがりてぞ立ち上るときく是れ其邊にて夭姚たる美人とハ云ふなり　（未完）

○色慾の罪

兼好のつれ／＼草に方にいみじくとも色好まざらん男ハいとさうぐ＼しく（さびしく／＼と云ふ事）玉の巵の當なき心地ぞすべきなんど書き置かれたるより蓄類に似たる色慾の煩腦になやまされて情緒の犬となり了らんとともて風流と心得るもののあるに至れるハ淺ましさ此上なきとなり佛蘭西の哲士パスカルと云へる人はクレオパツラの鼻にして少しく斜なるか若くハ平圓なりしならんにはアントニーの戰亂は恐くあらざりしならんと云へり實にも古今の歴史を案ずるに色慾に驅されて數多の人民を殺

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

す大戰亂をかもしたるといふ多し彼の希臘の美姫ヘレンをとり回へさバやとて希臘の國王が勇卒猛卒を驅つてツロイの都城を襲撃したるより羅馬のアントニーが埃及女皇のクレオパツラに深戀して爭論を開きたるまでの其間に無數の戰亂ありたりとハ云へ多くハ皆な戀の奴となりたる人ハ思ひ立ちなりゆめ恐るべきハ此の情なりいとつゝしむべきも此の情なり

○日本古代女流の風俗（二）

又た女いまだ男に適かざる間は髮を垂れをりて夫さだまれバ髮をあぐるなり万葉集（第十六卷）橘の寺の長屋に吾が寝ねし髫髪バなりハ髮結つらん。伊勢物語にも比べ來し振分髮も肩すぎぬ君ならずして誰か結べき。などあるにて知るべし又た女の間ハ人に名を問ハれても猥に告ることをせず獨だろの已が夫と為まほしく欲ふ人にのみ名を明ハしゝものと見え万葉集なる雄畧天皇の御製に　此岳に菜採そ女家告へ名告さぬ云々我こそハ夫とし告め家をも名をも。同集に「君を愛しみ告さぜ有き。など言る歌もありて女の其名も其宅も容易に人に告ざりしこと著明なり前なる雄畧天皇の御製の意ハ此の岡に菜を摘る女兒ハ我をバ夫として其名をも其家をも告るならんと云るにて。次なるハ女の歌にて其慕ふ男を指て君と云へるにて其義ハ君をのみ戀しく思ふが故に誰にも今日まで名を告さぜありしとハ云るなり此等の風俗ハ至極やさしくして且ただならざる慕ふべき例とこそ稱べけれ」然ハあれど茲に一の耻べく厭ふべきことの男女の間に有あり男ハ數婦をもちて其慾を縱まゝにし女ハ男の玩具びとなりて耻とせざりし彼の一男多妻の俗是なり余幼時後漢書を素讀せしに我が日本の事を錄し大人皆有四五妻其餘或兩或三と云るを見て幼穉心にも訝しく思ひたりしが其後ち山海經を見しとき晉の郭璞が註に我が日本を一男數十婦の國と言しに驚き漢人みだりに我が日本を辱しむとのみ思つめ其言を惡みて却て其實の目前に有を悟らざりき熟々思へバ或ハ妾といひ或ハ閨女といひ或ハ隱妻といひ至尊わたりにてハ妃といひ婦人といひ中宮といひ尊卑により其稱こそ殊なれ一男數妻の實ハ失ぜじ

（未完）

●寄書

○時習會の趣意

左の一篇は横濱山手百七十八番館なるフエリス女學校内ハ生徒諸氏が志ある者のみ集まりて時習會なるものを設立され毎月一冊づゝの雜誌を編集なさ玉ふ第一冊の初に記されたるものあり此の雜誌はもとより刊行さるゝならねバ惜しき金玉の

章を世に現れさで沒し玉ふも多のるべきに付き此の后ち其のうちの善きものを色ふて時々本誌に載するとゝすべし由りて今まれ其のはしがきともなし一にハ此會の趣意を世に現れさんとて左に此の一篇を掲ぐるになんある

凡そ一事一業を爲さんとするや必らぞ趣意あくんバ有るべからぞ今回我らが此一小雜誌を發行するや亦ろの趣意なきにあらざるなり抑も我ら社友は均しく修學の爲めに本港に在る者にして亦同窓の友なり嘗て約して曰我〳〵は此文運昌盛なる世に生れ此教育を受くこれ古人の受ざる所の幸福なり然れバ亦古人に超へたる責とも有するものなり宜しく互に奬勵勉學して天恩に報ひざるべからず爲に時習會を設け或ハ筆紙に由りて意を述べ或ハ口演に由りて志を表もし以て平素の學課を時に温習思繹し成業の稗益を謀りたりき此頃友人某我らに勸めて曰く卿等何ぞ雜誌を發行して論文を世に公にせざるにや我れ卿等の爲に此時習の文章口演ハ一時ハ耳目に屬するを惜むなり若し之を世に公にせバ此時習會の社友日一日より學業進歩の端を知るの益となるべしと我らは之を發行して世の益と爲す事ハ企望すべきにあらざれども社友學業の進歩と謀るにハ雜誌を發行するの益あるを知り友人の勸によりて遂に本誌を發行し之に名くるに時習の文字を以てせり蓋し之を吾論學而の語に取れり一論者本誌の發行をきゝ評して曰く古來名と實とハ相ひ符ひがたし而して名や實に過る事あるも未だ實の名に超る事あるハ聞のざるほどの事なり今雜誌に名くるに孔子の語を用ゆと彼等ハ日進開明の今日に處するに千載の古株を守らんとするろ恐らくハ人をして活潑の氣象を喪もしむる事ならん乎と嗚呼これ何の言ぞや世上の事物を考察それバ優勝劣敗の理を発るゝ事能はぞ古の今に及バざる事素より多し然りと雖ども萬事萬物悉く變遷古今同一なるものなしとおもふに至りては誤りならぞや論者も其一ならんろ俄に之を見れバ變遷したるがおとくなれども其實變らざるものあり彼の皓々たる月輪を見よ或人ハ之に對して悲哀を感じ或人ハ之に對して喜樂を感じ或人ハ之に對して神れ榮光をたゝふ或ハ哭し或ハ笑ひ或ハ歌ひ或ハ醉ふ均しく此月輪人を醉吟笑哭せしむるにあらぞ皓々たる月輪ハ古今一なり啻時と處によりて變ずるにあらぞ之に對する人に變換あるなり孔子ハ人なり然れど彼の發見したる眞理も彼とゝもに陳腐なりといふも我らの取らざる所なり我ら教育を受るものにして時習の功なくんバ決して成業を期すべ可らぞ我らハ孔子の問學に時習の功を用ゆべき事といひしを深く感ぞ他日の成業を期してかく名くるなり何ぞろの

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

文字の新古を論ぜん況んや名は必らずしも其實を奬勵するの勢力なきに於てをや愛讀諸君子本誌は時習の少年より發行せるものなれバ決して完全無疵の雜誌にあらざる故に其文の拙く意の淺きを推恕あらんことを伏て希ふ

○小督の局琴を彈ずるの圖

明治女學校にて右の文題を出し諸の女生徒をして作らしめ玉へる文章數多あるうち左れ二章の如きハ詞も意も共に美しく感歎する斗りなれバ今まこゝに之を左にかゝぐ

都にほど遠からぬ嵯峨の地は四方みな万朶の山櫻にて彌生の頃の風景ハ殊に美しき地なれども男鹿なく秋の夕は最とさびしくことふ人もなかりける此の嵯峨の奥に片折戸したるいと淋しき茅の軒ハ小督の殿が平の淸盛を恐れてのがれ玉ひし處なり昨日まではハ九重の內に在して恩寵を受けし身の今はこゝに世を忘のびまたもや大原に移らんとて三五の月さゆる夜ひとり想夫戀に思をよせて琴を彈き玉ふ御心は內いかバかりか悲しからん

右は竹下笹尾子の作なり　（十四年二ヶ月）

田口鼎軒評　全文虛語なし老手々々

巖木南石評　雅想高尙文辭巧を求めずして自らに可其の人と爲り思ふべし

社評　敘事清淡にして感慨限りなし

嵯峨のあたりの秋の頃千草の花もさまざまよむしのうらみも深き夜のながれも清きかつら川小督殿がかめ山の麓の片折戸したる山里にぞゐましける折ふし月も照りたりとゝふ人もなきまゝに君は御事たぼし出られて琴をぞいたし想夫戀をひき玉ひけるそみかもおすは大原にかへん姿れなごりとて思を琴に述べ玉ふ心は內ぞあはれなる○多しゆん子（十四年十ヶ月）の作なり

社評　亦た是れ妙文字たゞ巧ならんとするに失するのみ

○結婚する人の年

結婚する人の年齡已が國には余りに早くして種々の弊害多し先づ學文したる女生徒の學文も何の効能もなくたゞ僅かに子供の護する斗りなるに終ると一也生れたる子供の壯健ならざると父母もろともに其身の健康を失ふと二也其他にいろいろの損失あり吾れ之を論ろはんと思ふ節から本年一月四日の官報に結婚者年齡概况と題して左の報告載せられたれば今ま先づ之を掲け置き次号に於て日本男女の結婚に付き思ふ所ろを說述せべし

●結婚者年齡概況　明治十五年間一府二十四縣（東京、大阪、兵庫、長崎、新潟、函館、埼玉、千葉、茨城、群馬、山梨、滋賀、福島、和歌山、大分、鹿兒島、沖繩、札幌、根室の二府十七縣を除く）より申報せる結婚者の總數は三十一万千六百七十六十一偶其の內男女共初緣の者十二万六千八百六十五偶其の人員は二十五万三千七百三十人にして卽該人員の平均年齡に就きて觀るに各府縣中の最長なるもの

男に在りては京都府及岐阜縣にして各二十五年十箇月之に次くは石川縣にして二十五年七箇月なり女に在りては德島縣にして二十三年之に次くは京都府にして二十一年八箇月なり其の最少なるものの男女共岩手縣に在りて男は十七年七箇月女は十四年九箇月之に次くは青森縣にして男は十八年三箇月女は十五年五箇月なり而して之を全國に通計するときは平均男二十二年十箇月女十九年四箇月とす要するに本年の事實中年長なるは畿內北陸諸國に在りて年少なるは東北諸國に在るか如し又人口に對する結婚の步合を觀るに千人中十偶以上の結婚を爲せしは栃木、三重、愛知、靜岡、宮城、岩手、青森、山形、石川、山口、德島、愛媛の十二縣なり尙其の詳細は下表に就きて觀よ

府縣	結婚者平均年齢 男 年	結婚者平均年齢 女 年	人口每千に對する結婚の割合 偶
京都	二五、一〇	二一、〇八	八、七
神奈川	二四、〇五	二一、〇五	七、三
栃木	二一、〇〇	二九、〇〇	一三、八
三重	二五、〇四	二一、〇四	一一、三
愛知	二三、〇五	一九、一〇	一一、三
靜岡	二一、〇八	一八、一一	一三、七
岐阜	二五、一〇	二一、〇二	九、六
長野	二三、〇三	二〇、〇〇	九、二
宮城	二一、〇九	一八、〇八	一五、二
岩手	一七、〇七	一四、〇九	一四、九
青森	一八、〇三	一五、〇五	一〇、六
高知	二三、〇八	一八、〇七	七、三
福岡	二四、〇六	二〇、〇二	八、〇
山形	二〇、〇二	一七、一一	一三、八
秋田	二〇、〇八	一六、一一	八、六
福井	二五、〇一	二〇、〇七	九、九
石川	二五、〇七	一九、〇八	一一、八
鳥取	二三、〇〇	一九、〇九	九、三
島根	二五、〇	二一、〇二	九、七
岡山	一九、〇八	一五、一〇	九、三
廣島	二〇、〇七	一八、一〇	八、九
山口	二四、〇三	二〇、〇九	一一、五
德島	二五、〇九	二三、〇〇	一〇、〇
愛媛	二二、〇七	一九、〇四	一〇、九
熊本	二三、〇八	一九、〇三	五、三
平均	二二、一〇	一九、〇四	九、二

更に本邦と歐洲各國とに於ける平均の年齢を比較すれは左の如し但し本邦は明治十五年の事實にして歐洲各國は千八百六十年より八十年に至る二十年間の平均數なり

國名	結婚者平均年齢 男 年	結婚者平均年齢 女 年	人口每千に對する結婚の割合 偶
日本	二二、一〇	一九、〇四	九、二
魯西亞	二五、〇二	二一、〇五	八、三
英吉利	二八、〇七	二五、〇五	七、二
普魯西	二九、〇二	二六、〇〇	七、五
佛蘭西	三〇、〇二	二四、〇九	七、四
伊太利	三〇、〇二	二五、〇四	八、二
和蘭	三〇、〇九	二八、〇〇	七、一
瑞典	三一、〇一	二八、〇三	
白耳義	三一、〇三	二八、〇五	七、一
○	○	○	○

右の表に據りて觀れは本邦に於ける結婚の年齢たるや男子は二十二年十箇月女子は十九年四箇月にして歐洲各國中最も早婚なる魯西亞と雖尙ほ本邦より遲きこと男ハ二年四箇月女は二年一箇月なり又男子の最も晩婚なる和蘭に比するときは本邦の男子は之より早きこと七年十一箇月女子の最も晩婚なる白耳義に比するときは本邦の女子は之より早きこと九年一箇月なりとす要するに本表中結婚期の早きこと本邦の右に出つるものなし蓋し其の衛生上に關係を及ぼさゞると鮮きにあらさる可しと雖未た精緻の調査を爲し得さるため聊か其の本實を概畧して以て參考に供す(本年一月四日官報)

廣告

かなのくわいもとのとも畧規則

（一）かなのくわい本部ノ趣意ハ學問ノ道ヲ容易クシ世ノ便利ヲ計ランガ爲ニ總テ假名ノミニテ書キ記ルスコヲ世ニ擴ムルニアリ且ツてにをは假名遣ヒハ今行ハルヽ尋常ノ書方ニ隨ヒ言葉ハ勤メテ今ノ人ノ耳ニ入リ易キモノヲ用フ（但シ是ハ我會ヨリ公ニ世ニ出ス書物ニ限ルコニテ人々ノ私ニ記スモノハ素ヨリ其好ミニ任ス）（二）此會ノ趣意ヲ擴ムベキ術ハ大率次ニ掲ルガ如シ假名書キノ書物ヲ多ク作ル事。假名ノ新聞ヲ刷出ス事。假名ニ係ル演説會ヲ開ク事。國々ニ人ヲ出シテ我會員ヲ募ル事。學校ヲ設ケテ假名ヲ敎ル事。（三）誰ニテモ此會ニ入ラントヲ思フ人ハ其國所ト姓名トヲ假名ニテ記シ（傍ラニ漢字ヲモ添ヘテ）言ヒ込ムベシ會ニテ之ヲ認可スル片ハ會員證ヲ贈ル可シ（四）此會ニ入リタル人ハ會ノ費用ヲ資ル爲メニ次ノ四通リノ内何レニテモ其人ノ隨意ニテ出サルベシ

○第一類　一度限金拾五圓以上隨意
○第二類　毎月金三拾錢
○第三類　毎月金拾錢
○第四類　一度限金五錢以上隨意

（此四類ノ區別ハ別ニ仔細アルニアラズ志ハ厚クトモ其人々ノ都合アルベケレバ其隨意ニトテ立テタルナリ）

但シ二類三類ノハ三箇月分又ハ六箇月ヲ一纏メニシテ前納ニセラレタシ又遠キ所ノ人ハ郵便切手（一錢ノ）ニテ送リ越ストモ差支ナシ

（五）第一類第二類第三類ノ會費ヲ納ル人々ニハ假名新聞ヲ無代價ニテ進呈スベシ（六）毎月曜日午後三時ヨリ役員ノ集會ヲ事務所ニ開ク（七）毎月第二土曜日ノ午後一時ヨリ事務所ノ二階ニ於テ月次ノ集會ヲ開キ演説ヲ爲ス（八）毎年一月（日限ハ其時ニ報ス）會員ノ大寄合ヲ東京ニ開キ新年ヲ賀シ竝ニ前年ノ事務及ビ役人ノ改選等ヲ報告スベシ

東京々橋區山下町（山下門外）十三番地
かなのくわいもとのとも　事務所

社告

女學雜誌ハ是マデ大庭宗吉持主ノ處今回瀧田正義讓受ケノ相談取極マリ目下其筋ヘ持主變更願書差出シ中ニ候間御許可ノ御指令相下リ次第紙尾ノ持主署名ヲ相改メ可申候依テ此段豫告ス

女學雜誌社

社告

●本社ハ前金御拂込なき間ハ雜誌發送不仕候間御注文の節ハ必ず代價郵税共御送付可被下候●郵便切手代用ハ堅く御斷り申上候但し實際不便不得止の地に限り一錢郵劵一割増にて御送金可被下候●爲替ハ東京本郷郵便局へ向け御振込被下其爲替劵を弊社に送付可被下候●通運便と以て御送金の節ハ通運賃ハ勿論同會社より弊社への配達料（壹錢）とも御拂込可被下候●詩文和歌發句等の原稿御投寄の節ハ作者の國郡町村姓名等明細に御記入可被下候

毎月五の日發

女學雜誌代價郵稅表（府内無遞送料）

一册	正價金四錢	郵稅一錢	合計　現金五錢
十册	前金卅八錢	同　十錢	合計　前金四十八錢
廿册	同　七十錢	同　廿錢	合計　前金九十錢
卅册	同　壹圓	同　卅錢	合計　前金壹圓卅錢

廣告正價表

一行一回掲出	但廿八字詰	前金五錢
同　三回以上	同	同　一割引
同　六回以上	同	同　二割引

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町（大賣捌）	巖々堂
東京神田區雉子町	團々社支店
同　日本橋區新𦠆町	眞明堂
同　日本橋區馬喰町二丁目	自由堂
同　京橋區木挽町壹丁目	萬字堂
同　京橋區銀座二丁目	山口福松
同　本郷區元富士町	盛春堂
同　牛込區肴町	活神堂
岐阜縣美濃國笹土居町	星菱書房
越後國長岡	大橋書房
大坂備後町四丁目	岡島支店
東京芝西久保櫻川町（支局）	萬春堂

發行所

本局　東京本郷區弓町壹丁目廿番地　女學雜誌社

持主兼印刷人　大庭宗吉

編輯人　近藤賢三

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY